

ワンポイント・ブックレビュー

鴨 桃代著『非正規労働の向かう先』岩波ブックレット（2007）

雨宮処凜著『生きさせろ！』太田出版（2007）

景気の回復基調のもとで、大卒新卒者の就職は活況を呈している。とはいえ、大卒新卒者の“超売手市場”の背景には、企業における“失われた10年”の過度な採用抑制による若年層不足、“2007年問題”といわれる団塊世代の第一線からの引退といった事情のあることが見逃せない。この間、進められた規制緩和を通じた「構造改革」による企業業績の上昇は、企業によるパートや派遣、業務請負といった非典型労働者の活用の拡大と分かちがたく結びついている。このため、非典型労働という働き方は企業の労働者構成の主要部分に組み込まれ、今後も、減少することはないだろう。一方、この間、働くものの世界では、労働の劣化、ワーキングプア、社会的格差、貧困、将来不安といった社会的な歪みが広がっている。つまり、このような「構造改革」の一層の推進は働くものの福祉向上に直結する訳ではなく、働くものの事情を配慮した社会改革の必要なことを示している。そこでは、労働組合の果たすべき役割が問われることになる。労働組合でもパート、派遣労働者の組織化、大学生の社会経験機会の提供など多様な取り組みが進んでいる。

『非正規労働の向かう先』は、連合加盟の全国ユニオン会長として個人加盟のコミュニティユニオンを率いて非正規労働をめぐる問題に長年携わってきた著者による現場報告である。ちなみに、著者は韓国の労働運動の経験に学び、「直接雇用、無期契約、フルタイム、月給制、保険あり」という正規労働者の要件を一つでも欠けた労働者を“非正規労働者”と呼称している。本書は、63ページというブックレットのなかに、各種統計や連合の生活実態調査などをまじえ、「今、労働現場で何がおきているのか」において社会における非正規労働の構図を示し、これまでの活動体験を元に「相談窓口から見えてきたこと」「実態 - さまざまな差別」により民間・公務における非正規労働者の誇りを傷つけている労働現場の事例を報告している。そして、労働組合（正規労働者）との関係から「こうすれば、格差是正は可能」として正規労働者と非正規労働者の協働による取り組みを基本とする方向を示し、最後に「非正規労働の未来」として働くもの自らが声をあげる“勇気”の重要性を示している。本書は、非正規労働者をめぐる問題状況と著者が考える改革案を分かりやすく、コンパクトに示している。

多様化する非正規労働者の働く世界で、“偽装請負”や慢性化した違法状態などといった法の網の目をくぐり抜けるような事態が跡を絶たない。このような事態に対して、労働組合は、法的に重要な役割を担う存在といえる。しかしながら、雇用における正規労働者と非正規労働者との分極化は、正規労働者からそのような事態の理解を遠ざけることになりやすい。同じ職場で働くものが業務遂行上で相互理解を深めることが不可欠であるばかりでなく、今後、正規労働者という働き方や労働条件は非正規労働者の働き方に強く影響を受けることになる。非正規労働という働き方の人も家計補助的から主たる生計維持者として働く人が増えている状況下において、雇用形態の違いを超えて普通に働いたら普通に暮らしができる、仕事と生活の調和のとれた途といったささやかだが、当たり前な世界に向けた社会改革が求められているといえる。そのためにも、非正規労働という働き方の実態の理解とその上に立った問題の解決策の模索が、不可避で喫緊の課題といえる。

なお、就職氷河期を生きた若者の異議申し立てを著した『生きさせろ！』も、若者が晒されている世界を具体的に教えてくれる。（H・I）